



令和元年度 後期企画展の お知らせ



大賞受賞作品「私たちのだいな何か」

「いきもののまなざし」菊池咲展

令和元年8月31日(土)～11月30日(土)

2012 第5回利根山光人記念大賞展トリエンナーレきたかみ大賞受賞者

東日本大震災の翌年に開催された大賞展において、ひとつの成果として語られたのは「若い作家を多く見出せ、災禍を超えて次代を担う若者たちを発掘、美術界に送り出すことができた。」ということだった。菊池咲氏は奥州市出身で大賞受賞当時20代半ばという若さ。主に動物をテーマとして県内外で精力的に作品を発表し、高い評価を受けている実力者である。

大賞受賞作「私たちのだいな何か」の審査評には「簡潔な画面から滲み出るメッセージが明確で、独自の物語性を持ち、今の世に向けて根元的問いかけをしている。」とある。日本画材料の素朴でしなやかな形態のとらえ方も魅力であるが、対象となる「生き物」を見つめる姿勢が真摯で深い。

「人間とそれ以外の動物。可愛いとか可愛くないとか、害獣だとか、絶滅危惧種だとか。人間が勝手に決めた、そういう枠にとらわれない対等な存在として動物たちを捉え、描いてきたつもりです。擬人化ではなく、私が人間以外の動物に近づきたい。」(菊池咲)

この後期企画展では氏のここ10年の「生き物」をテーマとした制作の歩みを総括するとともに、本美術館では最も若い作家の企画展ということで、鑑賞を通して多くの若い感性にも新鮮な刺激を与えられればと思う。ぜひご観覧ください。



「声」

「鬼剣舞の力強さに胸打たれる。」

いのり込め描く鬼 鬼柳吉治展 8月29日(木)まで

鬼剣舞一筋であったことと同時に小学校教諭として勤め上げた氏を慕い、遠くはかつての赴任地久慈・麦生から40年前に教わったという教え子さん方も来館され懐かしく氏を語られた。鬼剣舞の保存会の方々からは実際の踊りとの違いなど、ちょっとした違和感も指摘される。確かに面の目、いわゆる「のぞき穴」は実際はやや中央によっているが、絵によってははつきりと視線を感じさせるように一方向を凝視してもいる。これらは単に表現の拙さとは言い切れないなんらかの意図を感じさせる。瞬間を的確に描写するというより、写真などみず、構成やイメージに力点を置いたスタイルが見る人を「力強い」とうならせる要素ともなっていて、絵という表現のあり方を改めて問いかける。

北上に生き、北上の魂を描いた画家の回顧展、ぜひご鑑賞ください。



『利根山画伯が遺したもの』に描かれたアトリエ建築の頃

高橋喜太郎氏著「利根山画伯が遺したもの」には1970年代(昭和50年前後)の利根山画伯を取り巻く北上市の状況が描かれている。喜太郎氏は当時の北上画廊の経営者で、県内外の芸術家との親交が深く、著作も多数ある。この本は2005年(平成12年)5月に刊行された。



通読して改めて当時の活力ある文化交流を思い知った感がある。画伯がみちのく芸能祭に制作のテーマを見出していたことは事実だろうが、何より東京、北上間の距離をもものもせずに行き来し合いながらの地元の有志たちとの交流はエネルギーに満ちている。「飲めや歌えの大宴会となった・・・」というくだりが一体何度紹介されるのであろうか。「予告もなく気が付けばその旅館で御夫婦で旅装を解いていた。」という記述からも、「北上愛」は強く伝わる。何より明るく人懐っこいという画伯の人柄が愛され、諸氏は手放しで大歓迎している。

かねてから要望していたアトリエ建設も、展勝地を見下ろすこの台地に決定するまでは曲折を経たようであるが、市長をはじめとする有志の協力を得ながら、画伯はダイナミックに事を推し進めた。

本の終盤では、画伯と共に気炎を上げて芸術を語り合っていた地元有志が1987年(昭和の終わりごろ)から立て続けに亡くなる。利根山画伯も1994年に死去し「まさに『巨星落つ』だった。」と。

全編通して年を追っての淡々とした記録ではあるが、まさに画伯と北上との関係そのものが「祭り」であり、この本の中に一時代の終焉までを見る思いがする。

太陽のように明るく、決断力があり豪快な利根山さんと、一度酒席を共にしたかったなあ・・・というのが率直で素朴な我々の感想である。(専任研究員)

受講生の声 当館主催「絵画教室」も終盤



○基本がわかってなかったので一から指導してもらえるのがとても助かります。ゆくゆくは風景画や孫を描きたいのですが、家に帰ると集中力が全く湧いてきません。長く続けるコツなどもあれば・・・。

○他の方の作品を見てとても勉強になります。もっとたくさん作品を見たいと思うようになりました。

○計画や制作の期限がある中での制作なので集中できています。仕上げなければという気持ちがあるので乗り越えようとする強い気持ちも出てきました。

○「絵を描くことは楽しく、また自由だ。」ということを教室に参加してわかりました。

また、テレビで美術の番組を録画して観るようになりました。「ミニ美術史」の学習がとても参考になります。

○自分のクセのようなものや個性として伸ばしていきたい部分が少しずつわかってきました。大人になってこうした機会が得られることに感謝です。

